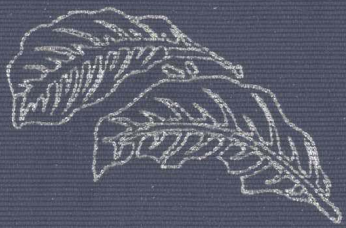

唐木順三

筑摩書房

唐木順三（からき・じゅんぞう）
評論家。明治三十七年長野生。京都大学哲学科卒。著書「無常」「日本人の心の歴史」（上下）ほか。

日本詩人選20　良寛

昭和四十六年一月二十五日第一刷発行
昭和五十一年十一月十五日第九刷発行

著者　唐木順三

発行者　井上達三

発行所　株式会社筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一（代表）
振替東京六―四一二三郵便番号一〇一―九一

印刷　精興社　　製本　鈴木製本所

©一九七一　唐木順三

（分類）1392（製品）13220（出版社）4604

目次

一　生涯懶立身――良寛の生涯と境涯　七

「生涯、身を立つるに懶し」　良寛出家の理由　「懶」の由來　「人間の是非は一夢の中」　「騰々、天眞に任す」　圓通寺での修行　諸國行脚　「天眞」父・以南のこと　騰々、優游、蕭灑　「雙脚、等閒に伸す」　良寛像　沙門良寛の屈折の跡　時代の狀況　閉塞の時代　龜田鵬齋　良寛と鵬齋　文人墨客と沙門　良寛壯年時の「衝天の志氣」　良寛の自嘲　「讀永平錄」　良寛と道元

二　「捨てる」と「任す」　九七

捨聖一遍の場合　信と任　遊行　道元における捨と離と任　「髪を剃り、また髪を剃る」　道元における轉　良寛の「天眞に任す」

三　良寛の資性　一三四
人生無常・世間無常　出家入道　禪における資性の問題　「我が性、逸興多し」　「愚の如く、痴の如し」　天眞爛漫
四　良寛における詩　一三七
「我詩は詩に非ず」　「心中の物を寫す」　「祇這是」　行キテハ到ル水窮マル處　坐シテハ看ル雲起ルノ時　禪における視覺型と聽覺型　良寛の「不繫の舟」
五　良寛の「戒語」と「愛語」　一六〇
禪における言語表現の問題　良寛において言葉のもつ意味　「戒語」九十ヶ條　「くさき」と「めきたる」　言葉と存在とのつながり　言葉と沈默　「言葉をしみじみといふべし」　「愛語」　言葉の布施　「道ふ」「道得」　「而今の山水は古佛の道現成なり」
六　良寛における「聞く」　一九一

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co

耳聾漢　眼と耳　良寛の音樂性、リズミカル
「唯聞ク落葉ノ頻リナルヲ」　見とめ・聞とめの問題　芭蕉と蕪村　良寛の「遍舟の興」

七　良寛における歌と書　三一

山かげの岩間をつたふ苔水の、の「の」　漢詩の「只聞く」と和歌の抒情の相違　「かたみとて」の歌「むらぎもの心は和ぎぬ」の歌　齋藤茂吉の良寛評「いざうたへ」の歌　良寛における遊び　優游貞心尼のこと　「あひたきものを」の歌　良寛と萬葉集　枕詞の多用　響き　良寛の書の音樂性獻石と良寛

あとがき　二六一

良寛略年譜　二六八

良寛詩歌索引　二七一

良

寛

一　生涯懶立身——良寛の生涯と境涯

「生涯、身を立つるに懶し」　良寛出家の理由　「懶」の由來　「人間の是非は一夢の中」　「騰々、天眞に任す」　圓通寺での修行　諸國行脚　「天眞」　父・以南のこと　騰々、優游、蕭灑　「雙脚、等閒に伸す」　良寛像　沙門良寛の屈折の跡　時代の狀況　閉塞の時代　龜田鵬齋　良寛と鵬齋　文人墨客と沙門　良寛壯年時の「衝天の志氣」　良寛の自嘲　「讀永平錄」　良寛と道元

生涯懶立身
騰々任天眞
囊中三升米
爐邊一束薪

生涯、身を立つるに懶(ものう)く
騰々、天眞に任(まか)す
囊中、三升の米
爐邊、一束(いっそく)の薪(たきぎ)

誰問迷悟跡　誰か問はん、迷悟の跡
何知名利塵　何ぞ知らん、名利の塵
夜雨草庵裡　夜雨、草庵の裡
雙脚等閒伸　雙脚、等閒に伸ばす

吉野秀雄がこの詩に附した現代語譯を寫す（吉野著『良寛和尚の人と歌』所收。この書は筑摩版の全集第四卷に收められてゐる）。何故吉野譯を選んだかといへば、いふまでもなくそれがいちばんすぐれてゐるからである。

「世の中に身を立てて、何事をか仕出かすといふことがいやで、ぼんやりとして、あるがままの天然自然の眞理に、自分を任せきつてゐる。頭陀袋の中には托鉢でえた三升の米があり、爐爐のそばには一たばの燃し木がある。米と燃し木、この外に何が要らうか。迷ひだ、悟りだといふやうなことは、もはや自分にはどうでもいい世界だし、まして名譽や利益など、自分の關はり知つたことではない。夜の雨ふる靜かな庵の內に、二本の足を所在なく伸ばしてゐるだけだ。」

この詩については私に忘れがたい思ひ出がある。田邊元先生が群馬の大學病院で亡くなられ、

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co

（昭和三十七年四月二十九日）北輕井澤で葬式をすました後、私たち數人が殘つて先生の遺品を整理してゐた。その中に、二百字詰の原稿用紙七枚にわたつて、この詩を三十回も書き寫された手稿が出て來た。ペン書きで、一字一劃をゆるがせにしない楷書であつた。先生はどういふ氣持で丹念にこれを寫したのであらうか。良寛と先生とは非常に違ふ。草書體と楷書體のやうに違ふ。先生は「懶」からも「騰々」からも遠かつた。米にも薪にも不自由は無かつた。然しこの詩の下四句、殊に下二句は、どこか一脈ではあるが通じてゐる。先生は昭和二十六年に夫人に先立たれて以來、その逝去までの十餘年、北輕井澤のあまり廣くはない山莊で獨りで起居されてゐた。手傳ひの者はあつたが、語り合ふ人は無かつた。夜雨草庵の裡に、雙脚、等閒に伸ばすの等閒を所在なくととれば、等閒に伸ばされたこともあつたらう。然し、さういふことだけではなく、私は先生がこれを、昔の人の寫經のやうな氣持で寫されたのではないかと思つた。先生には生涯、草體のやうにくづれたところ、流れたところ、騰々然たるところは無かつたが、晩年にはその外貌は鐵齋や安田靫彦が遺した良寛像にやや似て來てゐた。私には、あの四角四面であつた田邊元博士が、最晩年にあの良寛を思慕したことが面白かつた。良寛にはどこか日本人の原型のやうなところ、最後はあそこだといふやうなところがある。なほ田邊元全集第十四卷（筑摩）に先生の「生涯懶立身」の筆寫が寫眞版で出てゐることを記しておく。

さらにもうひとつ、心に浮んだことを書添へる。夏目漱石が晩年良寛に關心を持つたことは

その書簡によつて知られる。晩年則天去私を言つた漱石と、騰々任天眞の良寛とには相通ずるものがある。頑魯な良寛と漱石頑夫とは氣質的にも相通ずるものがある。

ついでに更にもうひとつ。寸心居士西田幾多郎先生の書には良寛のそれと相通ずる何物かがある。共に懐素を習つたことからいへば相弟子といつてもよいだらう。さらに寸心居士は好んで「騰々任運」とか「任運自在」とかの句を書にした。二人は禪において相通じてゐる。

良寛の右の詩は、良寛その人の履歴や生き方、暮し方を示してゐるとともに、その本來の面目をも示してゐる。この一篇を詳しく說けば良寛といふ人の半分以上を明らかにすることができる程である。良寛自身もいくたびかこの詩を揮毫してゐる。國上乙子神社の境内にこの詩を刻んだ碑が立つてゐるのも故なきことではない。但しこの一篇は良寛が乙子の草庵に移る前の、五合庵に住んでゐた頃の作であるといはれる。良寛の五合庵に在つたのは寛政九年（一七九七）から文化十三年（一八一六）までの二十年足らずで、四十歳から五十九歳までである。尤も初めの六、七年はここは假寓の地であつて、定住したのは四十七歳からである（私は良寛の年譜は大體は筑摩版の『良寛』〔遺墨集〕所載のものに據ることにしてゐる）。右の詩は五合庵在住の晩期のものと私は推定してゐる。

五合庵は國上山の山腹にあつた。國上山は寺泊の北東、彌彥の山の西南に在つて海に臨んで

ゐる。標高は三百餘メートル。五合庵は建坪は四坪半ぐらゐ、八疊ひと間といつたところらしい。元來は國上寺の「離れ」として使はれたものだつた。良寛には國上山や五合庵を詠つた歌や詩が多くあるが、その中からいくつかを引く。

あしびきの　國上の山の
山もとに　いほりをしつつ
朝ゆふに　岩のかげ道
踏みわけて　い往き還らひ
山見れば　山も見がほし
里見れば　里も賑はし
春されば　椿花咲き
秋べには　野べに妻とふ
小男鹿の　聲をともしみ
あらたまの　年の十とせは
過ぎにけるかも

山かげの岩間をつたふ苔水のかすかに我はすみわたるかも

夜もすがら草のいほりにわれ居れば杉の葉しぬぎ霰降るなり

世上榮枯雲變態　世上の榮枯は雲の變態
五十餘年一夢中　五十餘年は一夢の中
疏雨蕭々草庵夜　疏雨蕭々たり草庵の夜
閒擁衲衣倚虛窓　閒（閑）に衲衣を擁して虛窓に倚る

索々五合庵　索々たり五合庵
室如懸磬然　室は懸磬の如く然り（室にはなにひとつない）
戸外杉千株　戸外、杉千株
壁上偈數篇　壁上、偈（詩）數篇
釜中時有塵　釜中、時に塵有り
甑裏更無烟　甑裏（蒸籠）、更に烟なし
唯有東村叟　唯、東村の叟ありて

時敲月下門　時に敲く月下の門

ここまで書いておいて、さて冒頭に掲げた詩の一字一句の解明にとりかかる。

生涯懶立身　生涯、身を立つるに懶し

良寛は越後國三島郡出雲崎に、橘屋こと山本左門泰雄（別に次郎左衞門、また伊織ともいつたが、俳號の以南が通稱となつてゐる。以下以南を以つて呼ぶことにする）の長男として、寶暦八年（一七五八）に生れた。母秀子は佐渡相川の同族山本家から迎へられて養女となつてをり、以南が與板の新木家からの養子として秀子に配されたのである。良寛が生れた時、父以南は二十三歳、母秀子は二十四歳であつた。

山本家は代々出雲崎の名主役をつとめ、また石井神社の神主を兼ねてゐて、由緒のある家系であつた。山本家の嫡男と生れたからには家職をつがねばならぬ。良寛は幼名を榮藏と呼ばれた。榮藏は十一歳頃から、東へ五里ほど離れたところにある西蒲原郡地藏堂にゐた大森子陽といふ地方では聞えた儒者に就いて、五、六年のほど漢籍を學んだ。家職を襲ぐための教養、修行であつたらう。良寛の漢學、殊に論語の習得はこの時に基礎をおかれたものであらう。ここ

までは よい。然しどうしたことか、十八歳のとき榮藏は突然に出雲崎のすぐ西の尼瀬にあつた光照寺といふ禪寺にかけこみ、玄乘破了和尚に身を託した。この突然の出家の理由については從來かれこれと臆測されてゐるが、本人以外には確とはわからないのが道理である。

榮藏が何故に出家したかについて吉野秀雄の「大愚良寛小傳」(『續・やはらかな心』所收。全集第五卷に收む)が尤と思はれる點をいくつか擧げてゐる。その第一の點は生家の血筋である。山本家は代々神職を兼ねてはゐたが、佛敎にも深い關心を持ち、榮藏の弟妹たちの中、三人はみづから僧或は尼となつてゐる。一人(次男由之)は老後に剃髮して松下庵の主となつてゐる。山本家には世俗を超えた何物かを求めるといふ風があつたと思はれる。

第二の理由として、吉野は山本家の家運の衰微を擧げてゐる。出雲崎の名主であつた山本家と隣村尼瀬の名主京屋野口家との間に勢力爭ひがつづき、榮藏の弟でやがて山本家の當主となつた由之の代に至つて爭ひに敗け、その結果財政が逼迫し、村民の不評を買つた。卽ち山本家は以南以來次第に家運を傾けてゐた。さういふ困難な環境の中で嫡男の榮藏は名主見習をしてゐたのだが、もともと世才のない榮藏は事毎に無能ぶりを暴露し、「名主の晝あんどん」と綽名されたといふ。榮藏みづからが名主としては不適格であることを誰よりも知つてゐたに相違ない。西郡久吾の『沙門良寛全傳』(初版は大正三年。本年七月、京都の思文閣によつて復刻された)は若い頃の榮藏の人柄を敍して「性、魯直沈默、恬澹寡慾、人事を懶しとし、唯讀書に耽る。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.cc